

# 日本医学教育学会第31回大会：武蔵野赤十字病院（1999年）\*1

畑尾 正彦\*2

第31回日本医学教育学会大会は、堺隆弘武蔵野赤十字病院院長を大会長として1999年7月29日（木）、30日（金）の2日間、なかのZERO（東京都中野区）で開催された。臨床研修指定病院が大会を担当したのは、第16回の国立病院医療センター（当時）（大会長：鳥居有人先生）以来、大会史上2回目である。

基調テーマは、医学教育が患者さんの満足する医療に繋がることを表わす「暖かいところで満たす医学教育」とし、臨床教育に重点をおいた特別セッション（特別講演、パネルディスカッション、体験コーナー、ワークショップ）が企画された。

特別講演は、作家であり医師でもある加賀乙彦氏にお願いした。基調テーマに合わせて「医師の倫理」という題でお話くださった。「告知」という言葉を医療職は使うべきでないことなど、ソフトな語り口のお話は、聴衆のこころにしみる感銘深いものであった。パネルディスカッション1.「医学教育と看護教育—それぞれが大切にしているもの—」は、クルマの両輪に例えられる医師とナースとが、それぞれの後輩の育成について、同じ場で語り合うことで、医療現場の業務だけでなく、教育においても協力、相補し合うところを探ろうとするものであった。壇上でもフロアでも、互いに気づき合うところの多いセッションとなった。パネルディスカッション2.「医療人の育成—適性を選ぶ・暖かいところを育む—」は基調テーマに直結するパネルである。多彩なパネリストが一堂に会して、それぞれの内容と持ち味で語り合われ、会場の高い関心を集めた。パネルディスカッション3.「臨床教育における大学病

院と一般病院の連携」は臨床実習の学習効果を高めるために、一般病院にも実習の場を広げた協力体制を実践している方々のお話は、クリニカル・クラークシップの実際面にわたるもので、これから体制を整える大学にとって示唆に富むものであった。

体験コーナーと2つのワークショップは、本大会の目玉プログラムで、その効果を上げるために、定員限定の前登録制とした。体験コーナー「mini-OSCE」は、OSCEの医師国家試験への導入の方向が定まったこともあって、高い関心を集めた。NHKの取材があり、翌朝の「おはようコラム」で会場の模様が放映された。「Evidence-based Medicineの臨床教育」は定員を超える盛況であった。事前に資料の準備をされたコーディネータと、当日に各グループで参加者を支援された7名のチュータのお力で、内容の濃いワークショップとなった。「クリティカル・パス作成演習」は、医師と看護職とが1つのテーブルを囲む作業を通じて、チーム医療の教育を見つめるねらいであった。パスに経験の豊かな看護職のコーディネータの解説と進行で、参加者はパスの理解を深めるとともに、チーム医療を実感できるワークショップであった。

要望演題の「チュートリアル教育」「態度教育」「臨床技能教育」「クリニカル・クラークシップ」「プライマリ・ケア教育」「生涯教育」「国家試験・教育の評価」に55題をいただいた。一般演題の35題は「ワークショップ・医学教育の現状」「卒後研修」「看護・コメディカル教育」「教育方法」に分類され、多彩な発表と活発な討論が行われた。

大会参加者総数は571名（うち学生67名）、登録者数は470名（うち学生39名）で、多くの方々から、特色のある有意義な大会だったとご好評をいただいた。

\*1 31st Congress of Japan Society for Medical Education (1999), Musashino Red Cross Hospital  
キーワード：日本医学教育学会大会，第31回，1999年，暖かいところ

\*2 Masahiko HATAO 日本赤十字武蔵野短期大学